TBS落語研究会　２０２１年１０月２７日（水）（第６４０回）
新・落語掌事典

データ名：新落語掌事典 202110

田中優子

●知識と知性（浮世根問）

「根問」とは、根本まで詳しく問うこと、どこまでもこまかに問いただすこと、という意味で、室町時代から使われていた。これを落語のネタにするのを「根問」物という。いわば、答えようのない質問に頓知や駄洒落で答える､その答えの面白さを咄にしたもので、ほかに『やかん』などがこの「根問」物にあたる。しかし「根問」という以上その原型は単に知識を得るための問答ではなく、禅問答のような人はなぜ生きるのか、自分は何者なのか、という根本的な問いと答えにあっただろう。その知性にかかわる問答が、浮世のあれこれの問答に翻訳されるのが『蒟蒻問答』だ。クイズで高得点を取っても知性があるわけではないように、知性と知識のすれ違いはどんな時代にもある。知性が理解できなければ学問の意味もわからない。政府が学問を下僕にしようという筋違いも起こる。

●計算が合わない話（壺算）

『壺算』や『時蕎麦』のように、計算が合わない話は物語として面白い。そこで、落とし話以外にもその手の物語が書かれる。井原西鶴は『西鶴諸国ばなし』のなかで「大晦日（おおつごもり）はあはぬ算用」という話を書いた。貧乏な武士ばかりが宴会する話である。貧乏なのに宴会ができたのは、親戚に無心して十両借りたからで、借金で宴会するのもどうかと思うが、集まった武士仲間にその十両を見せて自慢するのも笑わせる。宴席がはねて帰ろうという時に一両行方不明になる。皆、貧しいのだが、なぜか最後は十一両に増えてしまった。行方不明の一両が見つかった上に、疑われた仲間の窮地を救おうと誰かが紛れ込ませたのだった。この合わない計算と救済の物語を使って、樋口一葉は『大つごもり』を書いた。この作品は、西欧の真似事ではない近代小説の始まりとなった。

●小判で良いのか？（愛宕山）

かわらけ投げは、武将が必勝を祈願してかわらけの盃を地面に投げつけて出陣したことから始まった厄除けである。しかし小判を投げても厄除けにはならないのではないか？江戸時代に小判を撒いたのは紀伊国屋文左衛門とされるが、伝説に過ぎない。一方、黄表紙（漫画本）などでは小判が降るのは「めでたい」こととしてよく使われた。たとえば、人々がみな金銭を嫌って孔子の教えを守るようになった結果、天が「御料簡違い」をして小判を空から降らせ、皆が迷惑する話。貧乏になりたくてしようがない人のところに何かと小判が集まってしまい、紀伊国屋伝説どおりに遊廓で小判を撒くが受け取ってもらえず、ついに世界中の金銀が「ウンウン」と唸りながら家に集まってきて居場所がなくなる、という話。読者はめでたい、羨ましい、と思いながら爆笑。小判投げもその流れだろう。

●何を飲み食いしたか（王子の狐）

この咄は、上方の『高倉狐』を初代の三遊亭円右が改作したと言われている。上方なら大阪の高倉稲荷が舞台だが、東京なら、と江戸時代から狐で有名な王子稲荷を舞台にしたわけだ。ところで人と狐が料理屋に入ると多くの場合、女は油揚げや天ぷら、男は刺身か豆腐を注文して酒を飲む。そういうところで狐らしさを演出する。しかし明治二十六年の三代目三遊亭円遊の口述を読んでいたら、食べ物が全く出てこない。そのかわり酒が詳しい。熱燗の他に葡萄酒、そして「大伝馬町の市久の小室麦酒（ビール）を一ダース」と、いやにモダンかつ具体的な注文なのだ。狐は何も食べずに「口当たりが好いもんだから」無闇に飲んで寝てしまうのだが、その料理屋は扇屋ではなく海老屋。地域のみならず時代によって、多様な咄が作れる演目だ。現代らしい咄も聞いてみたい。

●生き絵奇瑞譚（抜け雀）

木に彫り、絵に描いた生物が生き始める話を「生き絵奇瑞譚」という。左甚五郎が竹筒と水仙を彫った『竹の水仙』もその一種だが、その場合は名人譚でもある。ところで、生き絵奇瑞譚の由来は中国だと思われる。武漢に黄鶴楼という建物がある。ここは李白の詩でも知られているところだ。その黄鶴楼にかつて「辛」という酒屋があった。貧しい男が代金を払わずに酒を飲み続け、あるときみかんの皮で黄色い鶴を描いて去って行った。客が歌うと壁の鶴は舞った。辛は評判となり大繁盛する。再び男が現れ、笛を吹くと黄色い鶴は壁を抜け出した。男はその背にまたがり飛び去った。鶴に乗るのは仙人である。中国には『列仙伝』『神仙伝』に膨大な仙人の話が記されている。日本ではそれが職人の話になるとしたら、日本における職人の名人は仙人なみに特別な存在だったのである。

田中優子（法政大学名誉教授、江戸東京研究センター特任教授）
法政大学社会学部教授、学部長、法政大学総長を経て現職。
専門は江戸時代の文学、美術、生活文化、アジア比較文化。
現代社会についての連載エッセイなどもある。
『江戸の想像力』で芸術選奨文部大臣新人賞
『江戸百夢』で芸術選奨文部科学大臣賞、サントリー学芸賞
その他著書多数。2005年紫綬褒章。